

## 罹患者の娘のみならず孫まで結婚差別

——ハンセン病問題聞き取り——

福岡安則\*・黒坂愛衣\*\*

2019年9月1日、私たちは、東海地方のある海辺の90軒ほどからなる集落内のご自宅に、中田トヨさん、エツさん、カズエさんを訪ねた(本稿の人名はすべて仮名、以下敬称略)。

トヨは、1923(大正12)年7月生まれ、聞き取り時点で96歳。エツは、1928(昭和3)年12月生まれ、聞き取り時点で90歳。二人は5人姉妹の四女と五女であった。父親の富三郎は、1888(明治21)年生まれ。富三郎は戦時中にハンセン病療養所「多磨全生園」に収容され、1944(昭和19)年、脱走。1948(昭和23)年、再収容。1953(昭和28)年、全生園にて死亡。

エツは、戦後、近隣の村の青年と婿取りのかたちで結婚、1950(昭和25)年、1951(昭和26)年と娘2人を産むが、集落内の店屋のおかみの告げ口で、富三郎がハンセン病で療養所に収容されていることを知った夫が「親父は変な病気だっていうじゃないか」との捨て科白を吐いて家を出てしまい、結婚生活は破綻。エツの姉のトヨは、女ばかりとなった一家を支えるため、生涯独身で過ごす。

1951(昭和26)年12月生まれのカズエ(聞き取り時点で67歳)は、エツの下の娘である。カズエも近隣の村の青年と婿取りのかたちで結婚するが、1972(昭和47)年に娘を出産したあと、やはり、店屋のおかみの告げ口で、祖父がハンセン病だったことを夫の一族が知るところとなり、「あんたらの一家皆殺しにしても、べつに罪にならんのだぞ」とまで言われて、結婚生活は破局。

中田家にお邪魔し、冒頭の挨拶で「いろいろご苦労されましたね」と申し上げたところ、エツさんは「いまが、いちばん幸せ」と言葉を返された。

聞き取りの翌日、ちょうど早稲田大学で開かれた「第35回日本解放社会学会大会」に参加している最中に、カズエの娘さん(40代)からメールが届いた。「はじめまして。昨日はお忙しい中ありがとうございました。母が携帯が苦手なので代わりに送らせて頂きました。／わたしは、曾祖父には会ったことはありませんが、お墓に報告に行ってきました。祖母も今までは他の人には話せなかったことが話せてとてもすっきりした表情だったと、母から聞きました。本当にありがとうございました。」

キーワード：ハンセン病問題、隔離政策、結婚差別、ライフストーリー

\* ふくおか・やすのり、埼玉大学名誉教授、社会学、fukuoka@mail.saitama-u.ac.jp

\*\* くろさか・あい、東北学院大学准教授、社会学、kurosaka@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

本稿はJSPS科研費18K02003および19K02126の助成を受けた研究成果の一部である。なお、文責は言うまでもなく筆者自身にある。

ハンセン病家族訴訟弁護団編『思いよ届け！——ハンセン病家族訴訟原告からのメッセージ』（2019）に、「原告番号 61 番の姪であり、62 番の娘が、患者だった祖父の孫として執筆」として「60 代女性」の寄稿が収録されている。

私が物心ついたとき、家族は祖母、母、伯母（母の姉）、姉、私の、女だけの 5 人家族でした。私が 21 歳のとき、娘を出産しました。娘が 8 ヶ月ぐらいのとき、相手方の家族親戚が突然数人でやってきました。そのとき言われた言葉がいまでも忘れることができません。「おまえたち一家を皆殺しにしても、いいんだぞ」でした。何のことか私には分かりませんでした。その後、母から、祖父の病気のことを聞きました。母は「分からなければ、一生黙っていたかった」と言いました。

私の父親も、私が〔生まれて〕数ヶ月のとき、周りからの圧力に耐えられずに、出て行ってしまったようです。私も、娘も、父親の顔を知らずに現在に至っています。何年経っても、世間の偏見はなくならないということです。

母たちは、盆正月は〔祖父の収容されていた多磨〕全生園に行って過ごしたそうです。楽しかったとも言っていました。普通なら一緒に生活できたのに、本当に悲しいことです。最期〔のとき〕は、園に 1 ヶ月ほど寝泊まりをして看病し、看取り、小さな骨壺に入れ、持ち帰ってきたそうです。母たちは、周りから差別や辛い目にあっただけ、祖父に対しては、楽しい思い出ばかりだそうです。

今年、母は 91 歳、伯母は 96 歳。伯母は認知〔症〕も進み、介護を必要とする生活ですが、昔のことは覚えているようです。国がすべてを認め、謝罪してくれることを望みます。弁護団、市民のみなさまには、感謝しております。

以下、伯母のトヨ、母のエツ、娘のカズエの語りを紹介していきたい。

なお、〔 〕は、文意を明確にするために聞き手が補ったもの、もしくは、地名などの固有名詞をぼかして表記するために書き換えた箇所である。また、読み仮名をふった通常のルビ以外に、「手（ここ）」といった表記は、語り手は「ここ」と発音し、それを聞き手が「手」の意味だと聞き取ったということを示すための工夫である。

### 貧しい百姓暮らし

**伯母のトヨ** 子どもの頃は、うちも貧乏なもんだでね、〔尋常小学校〕6 年で学校をおりて、個人のうちへ奉公に行ったけどね。さほどつらいとも思わなかったけどね。

頭が悪いので〔学校の〕勉強はダメだった。でも、国語は大好きだったね。

〔子どもの頃からうちの手伝いをいっぱい〕したね。うちの仕事は、百姓。〔田畑は〕いくらもなかったね。〔さつま芋やらなにやら〕ありとあらゆるものをつくってたね。〔まだ〕おじいさ〔がうちに〕いたときは、タバコをやった。畑へタバコの苗を植えて。ほんで、海のほうの近くに、乾燥する小屋があって、縄へ、こうやって葉っぱを〔干して〕ね。それで、うちでやった〔タバコの〕葉っぱがいちばんきれいにできて。〔近くの町まで〕リヤカーで持って

いった。

田んぼは、3枚(こ)だかあっただよ。[でも、穫れた米は]年貢っていうか、地主のそこへ持って行って納めたもの。[だから、うちで]食べるだけは、とてもなかった。昔は、カボチャとかね、そういうものを食べてた。お米はあんま食べれなかったねえ。

小舟を操って漁に出て

伯母のトヨ 昔は、みなねえ、家で小舟を持ってたわけ。

娘のカズエ 自分のうちの舟？ [でも] みんなで地引き網、ひいたじゃん。

伯母のトヨ あれは、[戦後になって]個人の舟がなくなってから、部落(むら)の衆が[みんなで]乗る[大きな]船[ができて、地引き網もみんなで作るようになったよ]。

[富三郎さんが]個人の舟で[漁を]やってるときに、舟のすぐそばへ、このぐらい大きな多びす様の顔が出てきて、ニコッと笑ったって。こりゃあ、なにかあるな、と思って、急いで[漁を切り上げて]うちへ帰ってきた。そしたら、その帰ってくると一緒に、海が荒れてきて、台風になっちゃって、[逃げおくれた]ほかの2人は死んじやったけんが、うちの父親だけが[命拾いした]。

海へ行くまでに、見上げるぐらい高い葦(よし)がずうっと生えてたわけ。それで、[漁から上がった父親の後を]狐が付いてくるの。ザワザワザワザワ、その木をくぐってくるのが聞こえるだって。それだもんでね、「明日も漁をとらしてくれよ」つって、鯖(さば)だかなんかを[一尾あげてたんだって]。

母のエツ その話は、わたしもよく聞かされたよ。

伯母のトヨ 昔は、みんな、小舟を持ってて。持ってる衆は、いつでも、魚を獲りに行ってただ。沖へ出ると、鰹(かつお)も獲れた。ムラでやった地引き網は、鯛(いわし)ばかり。

[おじいさは、病気のために]手は不自由になってたけども、生まれつき器用だったわけ。そんで、お餅をつく臼(うす)をね、木の臼(うす)じゃ、くらくら動くんつってね、コンクリの臼(うす)を作ったの。わたし、手伝わされてね。桶(か)のはずいた板(いた)を並べてね。そこにコンクリ[を流し込む]。一緒に手伝ってさあ、作ってね。そうしたら、その臼(うす)を、近所で分けてくれっていう衆が出てきて、3つも4つも作ったのおぼえてる。手はきかんでも、ああやってね。

変形した指でおはじきを遊んでくれた父

母のエツ [おじいさの指は、わたしが]物心ついたときからもう、すべて変形してた。足は片方、悪かって。[物を]持てないじゃん。ほんだもんで、ご飯食べるつっても、晒(さらし)を手(こ)へ巻いて、縛っておいて、おさじならおさじをそこへ差して、こうやって食べてた。

[うちは]女[きょうだい]が5人。わたし、いちばん下だもんで、みな、上の衆は働きに出ちゃった。[すぐ上の姉のトヨとも]5歳ちがう。トヨばあらが[名古屋へ働きに]行ってからは、おばあさは畑へ行くもんでね、[昼間は]わたし、おじいさと遊んだ。富三郎さんがさあ、こうになってる手で、よく、おはじきを一緒にやって遊んでくれた記憶があるの。

[わたしが]小学校に行ってるときは、[おじいさは]もう全生園へ行っちゃ

ってた。〔だから〕子どものときは〔友達もいないから、まったくの〕孤独。小学校のときは、〔富三郎さんは〕いなかった。うん。いなかったね<sup>1</sup>。

**職員室で先生が父親の病気を言いふらしていた**

**母のエツ** 何年生ぐらい〔だった〕かな。2年生か3年生ぐらいかな。職員室へなにか用事があったって行ったとき、ある先生がね、「この子の親はこうこうこういうふうだよ」って話したわけ、職員室の先生らに。そうしたら、先生らが、やってたのぜんぶ手を止めてね、その話してる先生のほうへ、講演聞いているみたいに、みな、聞きいって。昔は「らい病」って言ったじゃんね。いまでこそ「ハンセン病」という名前と言うけども。わたし、なんで、この先生は、親のことをね、ここで言うのかなあと考えた記憶がある。

〔うちの〕隣からね、〔近隣の町へ〕お嫁に行ったひとがあって、その旦那さんが先生をやってて、〔わたしが通った〕小学校に出ていたわけ。それだもんだで、親のことが、ツーツーにわかってたわけ。

**収容、脱走、再収容**

**母のエツ** 〔最初は〕役場から言ってくださいね。〔おじいさに〕「全生園に行くように」って。それで行くようになっただね。

**伯母のトヨ** ちょうど10年いてきたね、全生園に。

**娘のカズエ** その10年いたって、脱走してきただもんでねえ。そんでまた戻されたら。

**伯母のトヨ** それだもんで、こんど、全生園のほうで、あれは何？ 八丈島？〔岡山の長島愛生園か。〕そっちへやっちゃうって言ったわけ。〔家へ逃げて〕来（き）れんように。そうしたら、富三郎さんね、「あんなほうへ行っちゃあ、おまえらが面会に来ることもできやせん。ほんだで、おれは〔全生園へ〕帰る」つって、自分から〔全生園へ〕帰って行ったわけね。

**娘のカズエ** 〔戦争中に、おじいさんが〕うちへ帰りたいつつたとき、アキちゃあちゅう人に〔一緒に行ってもらって、全生園から〕連れてきたら。アキちゃあは、この前、戸籍を〔弁護士さんに〕見てもらったら、おじいさんの〔義理の〕弟だつたわけね。

**伯母のトヨ** 弟になってるけど、ほんとの兄弟じゃない。でも、〔その人〕おじいさのことを、「にいさ」「にいさ」と言ってた。〔全生園から〕逃げてくるときも、〔再入所で〕行くときも、その人が付いていってくれた。

**母のエツ** 〔その人のうち、近くの村で〕大工やってたじゃん。竹でね、籠なんかをつくってた。〔わたしらも〕子どものときは、夏休みなんか、そこへ、ずうっと泊まったもの。全然、血はつながってないけどね。

その都度さあ、わたしらも付いて行ったもの。来るにも、帰るにも。いつも3人だったよ。トヨばあとわたしと、そのアキちゃあという人と。〔おじいさが全生園から帰ってくるときは、帰省許可をもらってじゃなくて〕こっそり。

〔こっちから面会に行くときは〕普通の日だと百姓の仕事をやらにゃあいかんもんで、お正月に行ったわけ。それだもんで、むこうは雪が積もってるじゃない。雪が下駄の歯へはまっちゃって、歩けんぐらいになっちゃって。秋津〔の駅〕で降りて、1時間歩いて全生園へ着かなかったよ。

〔あるとき〕面会に行ったときに、〔おじいさが〕ちょうど、寝ていて。「足

を切断して、今日で2日目だか3日目だよ」って言うのを聞いた。〔それ、わたしが〕いくつぐらいて、記憶にないな。

〔当時、おじいさんの病気が、なんていう病気か〕名前もなんも知らなかった。なんか、ひどい病気だなんていうのしか感じなかった。〔でも、うつる病気だとは〕全然感じなかった。そんだけどね、〔全生園の〕寮舎（へや）に一緒に住んでた人がね、おじいさん、こっちへ逃げてきていたときに、夫婦で訪ねてきたことがあった。それで、来た人が寒いつつたもので、おばあさ、自分の着てた服を貸してやったわけ。それで、帰ってっから、おばあさん、着っかと思ったら、おじいさが「よせ！」って、こうやって、怒ったもんで、おじいさは、ウツルちゅうのも多少あるかなあと思っていたと思う。

**娘のカズエ** そりゃあ、あんな隔離されるだもん、自分の病気はウツル病気だって思っちゃってるら、もう頭の中で。

**伯母のトヨ** 富三郎さんが体調を崩（くず）いたとき、1ヵ月以上、〔全生園の〕部屋へ寝泊まりして、介護した。わたし、なんしょ、あれだね。火を点けた。

〔火葬の準備をしてくれた患者さんらが〕「〔娘の〕あなたが火を点けなさい」つってね。で、わたしが火を点けて。それで、小さな骨瓶（こつがめ）へ入れて、持ってきて。それこそ、コップぐらいな小さなあれへ入れてきただけ。〔全生園ではお葬式は〕しなかった。〔こっちへ来ても〕やらなんだよ。

小さい、これぐらいのへ入れてきたのは、お墓へ入れたよ。わたし、あのお墓、建てた。〔昭和〕45年に。

**母のエツ** 〔亡くなったのが昭和28年だから〕お墓ができるまでは、どこに置いてあっただね。そういや、昔、石だけのお墓があったね。お墓ってわかるだけのような、なんでもないような石が置いてあったけえね。

**娘のカズエ** 〔わたしは、おじいさんと〕会ったことはない。わたし、〔昭和〕26年に生まれたけど、そのときは全生園（むこう）へ行っちゃってた。で、〔昭和〕28年に亡くなって。

**母のエツ** おじいさの遺骨をうちへ持ってきたときに、あなた、這ってた。はいはいしてた。だけどねえ、上の姉の写真は、赤ちゃんのとき持って行って、見せたことがある。

**娘のカズエ** 〔おじいさん〕東村山（むこう）の多磨〔全生園〕へ行ったらね、こっちのほうが貧しくて食べるものもあれだから〔って〕、コッペパンを取っとくんだって。それで、〔伯母と母が〕二人で〔面会に〕行くとね、隠しておいたコッペパンを「これを持って行って、うちで食べる」って言うけども、冬行くもんだから、パンがカチカチになっちゃってるんだって。「これ見つかるど没収（あれ）だで、こっちの裏口から出ていくと見つからんで」つって、裏口を教えるんだって。だけど、その裏口から出ていくときにも、やっぱり〔見張りが〕いてね、いつもそのパンを取られたって。

ただね、〔面会に〕行って親に会うのうれしいけど、親がいつも「すまん、すまん」て泣くもんで辛かった、つった。泣かれるのがいちばん辛かったって。

#### 名古屋の菓子工場へ

**母のエツ** 〔話を戻すと、わたしも学校は尋常小学校〕6年まで。〔高等科へ行かずに〕小6で下りたのは、わたしら姉妹（きょうだい）ぐらいなもんだね。〔うちが〕とても貧乏で〔高等科へは〕行けなかったもんで。



昔というのは、ムラに働き口を斡旋する人がいて、〔学校を〕下りると、ムラから何人か一緒のどこへ就職するわけ。隣村の衆も〔近隣の村の衆も〕。〔行き先は名古屋だね。〕みな、一緒のどこへ行ったもので、やっぱ、親のことを言いふらされるわけ。でも、〔わたしは〕3年、我慢していただよ。トヨばあは、もっと早く辞めちゃったいね。〔隣村の〕フクちゃんに〔親のことをみんなに〕言われて。

〔名古屋で働いたのは、製菓工場。寮で暮らしたわけ。〕つくるお菓子は〔作るだけで〕厭（あ）いちやって、食べたことない（笑）。〔つくってたのは〕いまでいうマシュマロだね。マシュマロと、ちやいなマーブルっていって、変わり玉。

**娘のカズエ** ああ、舐めてると色が変わってくる飴だね。

**母のエツ** こんなちっちゃいのでね。中を割ってくと、いろいろな色になっているの、うんときれいな。

〔わたしは〕6年おりて〔すぐ〕行ったものでね。〔いちばん年が下だった。〕あだ名は「チビ」で通ってた。誰に呼ばれるにも「ちび」「ちび」だった。〔名古屋から〕帰ってきたのは、17のときかな。

#### 「赤とんぼ」づくりの軍事工場で働く

**母のエツ** 〔隣村にね〕元の劇場があって、その劇場を〔工場に〕改造して、〔軍用練習機の〕「赤とんぼ」の羽を作ってたわけ。そこへ近くの衆は、ほとんど働きに行ってた。〔泊まり込みじゃなくて〕ここから通い。歩いて20分か25分。「赤とんぼ」は、木工のあれだもので、大工の衆、優先。大工の衆は、すべて召集ちゅうか、そこへ、みな、勤めていたわけ。

〔その隣村に〕あった〔織物の〕百台工場（ひやくだいこうば）が〔昭和19年12月7日に発生した東南海〕地震で全滅したよ。ぜんぶ潰れた。わたしら、ちょうど〔その隣村の〕木工工場に働いてて、空襲になって、防空壕へ入っただもん。その防空壕に入ってるときに、地震があって。それで、前のうちも、百台工場も〔潰れた〕。〔わが家は〕バラ屋だったもので、軽かったから、揺れても〔助かった〕（笑）。

それと、B29が橋を狙って、爆弾、落といたときがあつて。

**伯母のトヨ** 当たって、家族全員が死んじゃったうちがあつたねえ。

**母のエツ** 直径30メートルぐらいな穴が2つだか空いちやって。爆風で、訳がわからなくて、コロコロ転がってたのは覚えてる。

〔昭和20年8月15日は〕お盆の日で〔工場が休みで、隣村の〕友達のとこで、10人ぐらいで集まって遊んでた。天皇陛下が泣いて、放送してるのを、そのとき聞いたけどね。

#### 戦後は塩づくり

**伯母のトヨ** 昔は、うちで採れたカボチャを持って、名古屋まで売れえ行ったことがある。カボチャを襷（たすき）みたいなので、8コぐらい持っていったら、けっこう日当になった。

〔それと〕塩〔づくり〕を、終戦後、始めたじゃん。

**母のエツ** 塩も、やあつと、やったね。〔海水を〕桶で汲んで、木のギザギザになったあれで砂へ線を引いて、こうやって杓（ひしゃく）で掛けて、そんでお

昼はうちへ〔戻って〕来て、3時ごろ〔砂浜へ〕行くと、その山へ塩が付いたのがカリカリになってるわけ。それを、そおっと、上のね、カリカリのだけ取って、一樽ちゅうか、そんなかへ砂を入れてあって。そのなかへ、カリカリのだけ搔(か)いて入れて。〔それを〕海水で流すと、濃い塩水が下へずうっと落ちるわけ。それを桶でうちへリヤカーで運んできて、一間(いっけん)ぐらいの長さの、深さが20センチかな、そんなかへ空けて、朝まで〔火に〕かけると塩に煮あがるわけ。おじいさとおばあさん、夜通し朝までかけて、煮るわけ。朝まで煮んと、煮あがらんもんで、夜中、ずうっと寝なしに、おじいさとおばあさ、火をくべてた。そんで、朝になって、やっと塩が煮あがって、藁の簀の子へその塩を掬ってね。そうすると真っ白い、きれいな、きらきら光ったような塩ができたわけね。

**伯母のトヨ** 買いに来る人があったいね。ぼんたび。

**母のエツ** それと、その塩を〔わたしが近隣の町まで〕自転車で売れえ行つた。そのとき、一升枀へ一杯、30円だったかなあ。それ、魚屋へ売りこめ行つたり、そういうのをよくやつた。

#### 告げ口で結婚生活の破局

**母のエツ** 昔とゆうはねえ、隣村なり〔近隣の村〕の若い男の人たちが女の子のいるうちへ、10人から20人ぐらいで回って歩いてたわけ。夜、遊びに来る。そんでね、一軒のうちで10分、20分ぐらい話するの。〔そしたら〕お邪魔さんで、また、次から次へと、女の子のあるうちへ行く。そういう風習(あれ)があったのね。

それで知り合って、むこうからここへ来てくれたわけ、〔婿〕養子に。〔夫は〕3人兄弟の真ん中だもんで、うちへ来てくれた。〔酒癖が悪いとかそういうのは〕なかったね。昔というは、花札ちゅうか博打をやったじゃない。そういうのはやったみたい。〔夫は〕別珍〔の仕事〕をやつた。うちでも〔屋敷のなかに〕工場を建てて、6台ぐらいやるようにして。

それで、こっちへ来て生活してるうちに、親のことを告げ口する人がいたわけ。〔その人が誰かは〕わかってる。〔ムラのなかで〕お店をやつてる人。昔は、聞き合わせというは、店へ聞き合わせに行くじゃないですか。普通のうちは行けないから。わたしは好き同士で来てくれたもんであれだけでも、けっきょくは、その店屋のおばさんというのが、〔うちの〕親のことを〔夫に〕ね、言うようになって。それで、〔夫はうちから〕出てって、寄りつかんくなつちやつた。出ていくときには、「なんだ、親父は変な病気だつていうじゃないか」つていうことをゆつて出ていっちゃつた。

〔夫が出ていくとき〕「子どもを〔二人とも〕連れてく」つてゆつたもんで、わたしもそっちへ行って、3カ月ぐらい〔一緒に〕住んだ。〔それで娘たちを取り戻した。〕

**娘のカズエ** だから、〔うちは〕女だけになったもんで、〔トヨばあも〕親代わりでうちで一緒に働くしかないわけね。〔トヨばあは、独身で通した。〕けっきょく、女だけでずうっとやつてきたわけ。でも、べつに辛かったちゅうのはなかったね。女だけで、困つたちゅうことはなかったね。なんでも自分らで直したり、なんでもやつて。それ当たり前と思つちやつてねえ。

〔ただ、ちつちやいととき〕わたしが脱臼(だっきゅう)だつたもんだから、病院

の治療費に、よけいお金がかかったみたいで、近所で親しくしてたところから〔お金を〕借りたみたい。それ、お金で返せれないもんだから、農繁期のときに手伝いに行ったりしたちゅうのは聞いたことある。

**母のエツ** 借りたうちの稲刈りをやりい行っちゃあ、その分を引いてもらった、そういうのをずうっとやってた。

「父の日」の図工の時間に父の顔を描けと言われて

**娘のカズエ** 〔わたしが物心ついた頃〕切り屋ってゆっただけど、親らが、うちで、〔別珍の〕切り屋をやってて、なんしろ、遅くまでやってる。ほんとに。働いてるあれしか〔見てない〕。

**伯母のトヨ** 夜中の2時頃まで。

**娘のカズエ** やってたよね。昼間は、姉とか近所の子と遊んで過ごして。〔とにかく〕おばあちゃんがやさしくて、〔うちが〕女だけでも、べつに、なんで〔男〕親がいないのかちゅうのは、思ったことは一度もなかった。で、仏壇のところに、若い頃のおじいさんの写真が飾ってあって。兵隊の帽子をかぶってて。ああ、これがおじいさんで、若いときに戦争に行つて戦死したもんとばかり、自分だけで思ってた。親らにも〔おじいさんは〕戦争で亡くなったの、って聞いたこともなかった。

わたしは、自分の〔男〕親のことに對しても、「なんで、自分には〔父〕親がいないの？」ちゅうのは、一度も聞いたことなかった。そのぐらい、なんていうのかなあ、べつに男親がいないから特別困つたちゅうことがなかったわけね。わたしの同級生では、片親だったのはわたしだけ。そのことで、なんにも言われたことはない。先生方も〔わたしのことを〕すごいかわいがってくれた。

それで、わたしが、男親がなくて、いちばん辛かつたちゅうのが、3年生か4年生のときだと思うの。それまでは「母の日」しかなかったけど、そのときに「父の日」ができたの。受持ちの男の先生が図工の時間に、「父の日だから、今日はみんな、お父さんの絵を描いて」って。えー、お父さんの顔、描けって言われたって見たこともない。どうしたらいいかなと思って、わたし、鉛筆を、こうやっててね、ずうっと〔絵を描けないでいたの〕。わたし、絵を描くのはすごい好きだったけどね。そうしたら、先生が「ああ、そうか。おまえ、お父さんがいなかったね。じゃ、先生がモデルになってやるで、先生を描け」つたの。で、先生が前へ来てくれたけど、泣いちゃった。先生が「じゃ、お母さんでも誰でもいいで、うちで描いてきな」って言ったわけ。その〔図工の〕時間（とき）が終わつたら、横にいた男の子に「なんだ、おまえ、なんで描かんのだ？」って言われたのが辛かつた。そのとき、はじめて、ああ、わたしは、そういや、父親がいなかっただなあと思って。そのとき一回だけ。あとは、べつに、どうってことなかった。

わたしは、それから何年か経つたときに、「父の日」があるとね、けつきよく、わたしみたいに辛い思いをする子どもがいっぱいいるじゃないかなって。「父の日」「母の日」なんてね、なくなればいいと思った。

姉妹で「劇団ひまわり」に応募

**娘のカズエ** わたしが小学校1年——姉と年子だけど、〔姉は〕早生まれだもんだから、わたしが1年だと、姉は3年になるわけだね。そのころね、東京



にある「劇団ひまわり」へ連れてかれたのね、親にね。二人とも審査が受かったもんだから。それで、訪ねてったところが、あまりにも路地裏で陽が当たらない場所だったもんで、こんなとこへとても置いていけないつって、そのまんま帰ってきちゃったわけ。いま思うとね、あとからこうやっっているいろいろわかったときにはね、きっと、〔母は〕自分と同じ思いをさせたくないもんで、〔遠いところに〕預けちゃえば、子どもは言われなくてすむっちゃうのを思ったじゃないかなあと思ったの。だって、あんなかわいがってた親がね、わたしら二人を〔よそに〕預けちゃったら、伯母さんとおばあさんと3人きりになっちゃうわけ、女が。なんの張り合いもないわけだけど、でも、そうやって連れてったっちゃうのはね、自分の手許（とこ）から離してでも、同じ思いをさせたくなかったからじゃないかなあと思う。

#### イチゴの箱打ちの手伝い

**娘のカズエ** わたしが小学校のとき、すごい〔朝〕早く親らがイチゴを採りい行く。薄い木の箱へ〔イチゴを〕並べるわけね。夜ね、ちっちゃな細い釘をね、打って、箱をつくるの手伝った覚えがある。ざる一杯ぐらいね、形が変になったのとかね、そういう市場（しじょう）に出せれないイチゴを、朝、学校へ行く前に、食べてくように〔食卓に〕出してもらってた。夜、その箱打ち。トントントン、家族みんなで箱打ち。

#### 授業参観にはかならず来てくれた母

**娘のカズエ** うちの学校の時代は、いじめとかは全然なかった。〔みんな〕すごいやさしくて。わたしも、足が悪かったせいか、背が極端に低かったの。小学校6年のときに120何センチぐらいしかなかった。だもんだから、学校の遊具へ掴まるのができなかつたのね。だけど、身長が高い男の子が上げてくれたりして、いじめられるっちゃうのはなかつたね。

小学校の参観会っていうと、〔母は〕いつも、給食が終わって〔まだ〕休み時間に来るのね。かならず一番に来るの。で、わたしは嫌だったわけ。まだ席に着く前から、1人だけ来てるもんだから。ほかのおかあさんは授業が始まってから来るとか、そういうあれだったけどね。——中学卒業して20年ぐらいしてからかな、中学校のときの同級生が集まったの。そのとき、その背が高くて、いつも〔遊具に〕上げてくれた子がね、「おれはカズエさんのうちが羨ましかったやあ」って言うのね。「えっ、なんで?」「カズエさんの親は授業が始まる前に、かならず参観会に来てくれてた。うちは百姓だから、親はいつもうちにいるのに、来てくれなかつたり、遅れて来る。それだもんで、すごい羨ましかった」。わたしね、ああ、そうか、そこまで気がつかなかつたなあと思って。そう言われてはじめて気がついた、親の愛情（あれ）が。当たり前だと思ってたのが。

中学校は、中学3年の2学期から〔通う中学校が変わって、けっこう遠くなった〕。自転車〔通学〕だった。だけど、わたし、自転車へ乗るにも身長が低かつたもんだから、足が着かないのね、ペダルまで。だもんで、よく転びそうになって。舗装されてる道がなくて、砂利（いし）の道だったのね。自転車でも、相当かかつたよ。30分以上かかつたじゃないかな。雨でもなんでもバスは使っちゃいけないくて、合羽（かっぱ）着て、自転車。

祖父は「戦死」、父は「女をつくって出ていった」と思い込んでいた

**娘のカズエ** 高校は、ほんとは姉と一緒にどこへ行きたかったんだけど……。〔姉は、このへんの地方都市の、ちょっと名の通った私立の女子高へ、バスに乗って行ってた。〕だけど、親に「お金がないから、頼むから近くへ行ってくれ」って言われて。それで、近くのね、自分で自転車で通える〔公立〕高校へ行った。

それで、〔姉の通っていた高校でも〕母子家庭には補助を出してくれるちゅうのがあったけど、姉はそれが嫌でね、「絶対、嫌だ」って言って、それをもらわずにやったもんだから、〔親も〕「とても〔私立に〕二人は出せない」って。

姉は〔男親が出ていった経緯を〕知らない。姉が物心ついたとき、なんで〔男親が〕いないか〔母に〕聞いたときに、「女の人が出てきて、出ていった」ちゅうように聞いたもんだから、わたしにも「女をつくって出ていった」って言ってたのね。〔わたしも〕その説明を信じてた、ずっとね。〔おじいさんは戦争に行行って死んだ。〕男親は、女をつくって出て行った。そうやって自分では思ってたわけね。

保母になりたかったけど

**娘のカズエ** 〔わたし、将来なりたかったのは〕保母。子どもに携わる〔仕事をしたかった〕。それで、高校のときに先生に「保母になりたいけど、とても大学へ行くお金はない」って〔相談〕したら、先生が「じゃ、孤児院みたいなところへ〔見学〕行ってみたら」って、孤児院に見学へ行くのをやってくれたの。そしたら、みんな懐いてくれてるし……。で、高校（がっこう）をおりたときに、〔地域の大きな〕病院のなかに医者とか看護婦さんの子どもを預かってる託児所があって、そこへ〔見習いで〕行ったけど、なんちゅうのかな、〔子どもらは〕すごい懐いてくれたけど。いちばん上のひとのやり方が、自分の言うことを聞かずにぐずる子を柱へ縛りつけたり、そういうことをやったもんだから、わたし、そんなこととてもやれないなあと思って。それで、〔わたしが子どもらに〕「おねえちゃん、おねえちゃん」って言われてると、「先生って言いなさい！」って怒るの。わたしが「いいです。おねえちゃんでも」ついたら、「いけませーん！」って怒る。それが苦痛（あれ）でね、わたしはとてもこういうあれは勤めれないと思って辞めちゃった。

それで、うちで織物工場を始めたもんだから、それを手伝った。親が「車を運転して〔製品を〕納めへ行くのをやってほしい」つたもんだから、まあ、それでいいかあと思ってね。

一時、景気よかったもんねえ。〔おかげで〕この家を建てれたわけじゃんね。

**母のエツ** お金になったときは、〔月〕百万になったもん。

**娘のカズエ** 〔当時、ここの集落で〕織屋（おりや）やったうち、一気に増えたものねえ。10軒やそこらあったよ。——そのとき貯めたお金で〔昭和〕51年にこの家を建てた。ここを通る人に言われたよね。「このうち、女ばっかだもんで、始末して、こうやってうちを建てた」とかっていうのが聞こえるのね（笑）。言いたい人には言わせとけばいいと思ったけどね。

それで、うちで〔織屋を〕ずうっと手伝ってた。いつまで工場をやっていた

かね。景気が悪くなってきたから、国が織機（しょっき）の買上げをすると。もうこれが最後の買上げ、これ以降はやらない、いま出すなら国が補償しますちゅうので、そのときに出したもんね。〔最後は〕わたしが一人でやってたじゃんね。昭和47年5月に生まれた長女をおんぶして。あの子がまだ歩かんととき。〔伯母と母は〕外へ〔働きに〕行っちゃったもんで。母らは、ゴルフ場へ〔働きに〕行っただよ。ここの人を集めてね、マイクロ〔バス〕で迎えに来てくれて。織ってるのがちょうどキリにならないとあれだもんで、その何台かをやるのに、わたしだけがうちにいた。それで〔わたしがうちで〕おばあさん、見てただもんね。

### 出会い、そして破局

**娘のカズエ** 〔夫とは〕いつも行っていたガソリンスタンドで、よく〔顔を合わせて〕話をしだして。すごい性格がおとなしいのね、相手がね。〔当時は〕わたしもまだ、けっこうおとなしかった。けっきょく、いろいろで、強くなっちゃったわけだけど。——姉は気が強かったの。親がいないちゅうのを、うんと気にしてたみたい。それで、わたしが誰かにいじめられちゃいけないって、「おまえはおとなしいで、なんにも言えない。〔わたしが〕守ってやる」ちゅうような感じ。

〔夫の実家はちょっと離れたとこの村だったけど、ほかに〕長男と妹がいたもんだから、うちへ入ってくれて。その親っていうのは、二人ともすごい無口なおとなしい人。きょうだいもおとなしくて、あんまり話をする人じゃない。家族全体が、話をするうちじゃない。

なんていうの、〔わたしの〕親らにすると、この人は嫌、あの人は嫌なんて選んでると、けっきょく、自分のうちの病気がわかったときに、また〔破談〕になっちゃうから、〔とにかく〕もらってくれるという人のところへは出したかったみたいなの。だもんで、姉は、〔相手の人が〕もらってくれるちゅったもんだから、出しちゃったわけ。〔相手の人はこの地域の地方都市に住む人で、勤め先で知り合ったみたい。〕親にしてみたら、〔嫁に〕行っちゃいかん、うち〔の跡〕を取ってくれにゃあっていうと、また聞き合わせとか来て、ダメになったりすると〔困ると思ってたみたい〕。

わたしのときも、けっきょく、〔相手が〕うちを捨てて、こっちへ来てくれるって言ったもんだから、親らは、じゃあ、もう、聞き合わせもなんにもないから、入ってもらやいい、と。だけど、娘が〔昭和〕47年に生まれて、〔生後〕8ヵ月ぐらいで、まだハイハイやってたときに、わかっちゃったわけね。あとで親が言うには〔例の、お店のおかみが告げ口したっていうのね〕。

10人ぐらいで来たよね。親とかきょうだいから、みな、連れてね。〔夫は〕その前に、ちょっと〔実〕家へ行って〔何日か〕帰ってこなかったもんだで、なんで帰ってこないのかなあとは思ってた。そうしたら、夜だよ、もう暗かったものね。車に乗ってきたみたいね、みんなでね。

それで、オジさんという人が、「おまえらなんか、家族皆殺しにしたって、いいだぞ」「このうちの家族、みんな殺したって、べつに罪にならん」って。はじめて〔顔を〕見るオジさんが、ガンガンガン言ってる。どこのどういう関係のオジさんかもわからないしね。夜、いきなり来て、なんでこんなこと言われるのかってね。なんか、わたしらんうち、なにか、あったのかなあと思いつながらさ。

だって、いままで、べつに、なんにもない。悪いことしたおぼえもないしね。なんのことかわからなかった。

〔でも、その段階で〕わたしは、部屋から出された。親が「子どもが起きて泣いちゃいけないで、あんた、はあ、あっちへ行っちな」って。だから、わたしは、そのときの話は〔それ以上〕聞いてないもんで、なにがなんだか、さっぱりわからなかった。なんで押し寄せてきたのか、何を言ってるかちゅう自体も、わからなかった。

で、〔押しかけてきた人たちが〕帰ったあと、その日のうちに、母がこれこれこうでって、おじいさのことをちょっと話してくれたかな。ハンセン病で、東村山の施設へ入って。それで、〔自分らが〕子どものときから、この前を子どもが通るのに、「うつるで、息しちやいかん」って、口のまわりをこうやって、みんなが通ったって。うんと辛い思いしたちゅうのね。「あんたらには、このことはわからにやあ、ずうっと隠しておきたかった。話したくなかった」ちゅって。それ聞いても、わたしは、べつに、なんでもなかったわけね。そういう辛いあれ、自分が体験してないもんだから、ただ話に聞くだけだもんで。なんのことかわからないことを親がゆったもんだから、「ふーん」ちゅうだけ。そんで親は、「わたしが全生園（びょういん）へいつも見舞いへ行ってたときに、病院の先生が、うつる病気じゃないで大丈夫だよ、って言ってくれたけど、そうやって〔辛い思いをするように〕なっちゃってた」って言って。「ああ、そう」って言ったけど、べつに、それだで、おじいさんをね、なんでこんな病気になっちゃったんだとかっていうような気持（あれ）は湧かなかった、全然。「うんとやさしい、いい親だった」というのしか聞いてなかったもんだから、そういういい印象しかなかったもんだから、べつに、なんとも思わなかった。

けっきょく、そのオジさんらが夜来たときも、夫（ほんにん）は一言も言わなくて。で、一緒に連れ帰られたわけね。帰っちゃってから、わたしの従兄（いとこ）のどこへ、「もう一回、おれは戻りたい」って電話がきたみたい。わたしはもう、そんな親戚がいるし。「一家皆殺し」なんて言われたらとても怖くてね。そのときに、なんか一言いってくれてれば〔ともかく〕、そのときは黙ったまま、〔来たときと〕同じように〔みんなに〕付いて行っちゃったもんで、この先、なんかあったとき〔のことを考えたらね〕、やっぱり、なんか不安だなあというのと、またあのオジさんがなんか〔言ってきた〕ときに、あっちの親も絶対助けてくれない。「もう、いいよ、お兄さん」とかね、なんか言ってくれるならいいけど、なんにも言わずに、ただ来て座ってるだけの感じで〔帰って〕行っちゃったもんだからね。

〔夫は、あのとき、娘の〕寝てるのを見てもいかなかった。わたしとしては、ああ、もう、こうやって、自分の子がこっちにいるのに、帰っていくときに見せせずに、親らと、言うなりになって行くような人では、この先はもう不安だなあと思った。

それから、わたしはうちにいただよね、子守りで。〔伯母と母の〕二人が働きに出ていた。わたしが〔働きに〕行くとってゆったけど、「自分の子はまだ〔自分で〕見ていたほうがいい。うちにいればいいよ」ちゅうのでね。

### 30歳で姉の勧めで再婚

**娘のカズエ** わたしは 30 のときに再婚した。姉が〔世話をしてくれた〕。「あんたらうち、女ばっかで、心配(あれ)だでね。自分のよく知ってる人で〔どうか〕って。それで一緒になった。

姉は、「なんで、あんた、別れた？」とかって、細かく聞く人じゃない。別れたならもうしょうがない、ちゅうような感じ。ただ、姉が、この家が女だけちゅうので、うんと不安がっちゃってね。姉〔の勧め〕が強かったの。お姉さんがそんなに心配してくれるなら、まあね、たしかに年もとってくし。おばあさんも、もう 80 いくつだったもんだから、〔たしかに、うちは〕女だけだし、姉があんまり言うもんだから、まあ、あれかなあって考えて、それで再婚した。

〔再婚相手は〕長男だけど、弟がいるからって、こっちへ入ってくれた。「おれはうちを捨てても、べつにいいで」つってね。〔相手の〕親はグズグズゆったよ、「くれたくない」って。〔夫は〕結婚はしてなかったけど、同棲みたいにして、からだが弱い女の人と一緒にってたけど、その女の人が亡くなっちゃったのね。だけど、あっちの親からしたら、初めての結婚(あれ)で、長男で、うちを取ってほしいちゅうのがあったみたい。

そのときは〔祖父のことは〕言わないようにしてた。べつに言う必要もないかなあと思って。〔夫には〕「おまえらんうちは、親も別れた。おまえも別れた。女がよっぽど強いだか」ちゅうのは言われたのね。そういうにパッパッ言うもんだから、「あんた、なにもわからんくせに、そんなこと言わんで。いろいろ訳はあるだで」って言ったら、それ以上は聞かなかった。根掘り葉掘りは聞く性格(あれ)じゃないもんだから。〔祖父の〕写真が飾ってあるのも、「このおじいさはいつ亡くなっただ？」とか、そういうのも聞かない。〔祖父の病気のことは、いまだに〕話してない。

〔夫は〕ちっちゃいけど、〔自分で〕会社やってる。〔わたしの〕娘の旦那が〔その会社の〕跡取りとして、そっちに住んでたんだけど、その〔義理の〕息子が 9 年前に亡くなっちゃったの。それだもんだから、夫(だんな)が、二十四時間掛かってくる電話を〔自分で〕受けたりしなきゃいけないもんで、〔いまは〕会社の近くへ住んでる。わたしも〔平日の昼間は〕そこへいつも通ってるわけ。会社の従業員の世話(あれ)やったり、電話番やったり。

〔再婚してから〕男の子が 1 人〔生まれた〕。その息子は、〔富三郎の病気のことを〕知ってる。〔家族訴訟のことで弁護士の〕先生が〔うちへ〕来たりするもんだから。「なんで、お客さんが来るの？」って言うので、「おじいさんがこうだったもんで、そういうのの裁判があるもんで〔話を〕聞きに来る」って言ったら、「ああ、そう」って。

〔30 代後半になるその息子は、いま、親の会社を〕手伝ってる。〔義理の〕息子が亡くなっちゃったもんだから、〔勤めていた〕会社辞めて、手伝いへ来るようになった。〔息子は〕なんちゅうのかな、今時(いま)の子ってゆやあ、いまの子かな。こだわりがない。人種差別みたいなのは、すごい嫌う。わたしがねえ、「自分がされて、嫌な思いとか〔する〕言葉だったら、絶対、人に使っちゃいけない」って、ちっちゃいときから育てたの。それを〔娘も息子も〕二人とも守ってくれてるのかなあと思う。

〔息子は〕高校まで。大学へ行っほしかったけども、「勉強、嫌だ」つって行かなかった。勉強、好きそうじゃなかったね。わたしが自由に育てすぎたのかね。オーストラリアへ行っちゃったの、サーフィンをやりたくってね。中学



のときから、ずうっとやってたもんだから。本場の海で遊びたいつってね、会社勤めなくて、バイトしてお金貯めてね、3ヵ月、ゴールドコーストへ行っちゃった。

それから、こんど、カナダの語学学校へ行くつって、手続きまでしてたの。それで、行く日を何日って決めるときに、〔義理の〕息子が亡くなっちゃったもんだから、それで行けなくなっちゃって。

〔娘には〕2人〔子どもがいる〕。わたしは〔おじいさんの病気のことは娘には〕一言も言っていないのね。〔でも〕この前、はじめて聞いたけど、「ばあばから聞いたよ」ちゅうの。〔娘の〕上の子が、いま、23になるのかな、4かな。その子が、朝、保育園へ行く前に、「足が痛い、足が痛い」っていうもんだから、「じゃあ、今日は保育園へ行って、治らなかつたら、明日、医者へ行くね」ってゆって。で、たまたま、友達（つれ）で、靈感がすごい強いひとがいるの。怖いぐらい。信じる人もいれば、信じないかもしれないけど。その人のところへ行って、「上の子が、今日ね、足が痛い、足が痛いつっていうけどね、なんか悪い病気じゃないよねえ。明日、病院へ連れてくだよ」つったら、その人がね、こうやって〔占いを〕やりだして、「〔あんたの〕うちに、足が悪かったおじいさんがいない？」ってゆったちゅうの。「ああ、そういえば、うちに死んだおじいちゃんの若いときの写真があつてね。その子がね、〔親戚のうちに〕行ったとき『おじいちゃんが、いつもお茶を飲んで、ぼくらの遊びを見てるよ』って言ったちゅうの。そんで、『ああ、あっちのおじいちゃん？』つったら、『ちがうよお。あの写真のおじいちゃんが、お茶を飲みながら、ぼくらが遊ぶのをニコニコ笑って見てる』って。そういやあ、そうゆったことがある」って言ったらね、「あんまり〔気を〕働かせると、余計、強いあれが出ちゃうでね、もう、ほっときなよ」って言われたって。〔娘が〕うちへ来て、「ねえ、ばあば、うちに、なんか足の悪いおじいちゃん、いた？」って聞いて。それで母が「こういうわけで片足、切ったおじいちゃんがいたよ」ちゅうのを言ってくれたというのを、〔つい〕先日言ったの。「お母さんから聞くもつと前から、わたしは知ってたよ」ちゅうの。「ただ、お母さんには言わなかつただよ」って。

わたしは一言も言っていなかったの。ただ、〔弁護士〕の先生が来るときに、会社から抜けなきゃいかんもんで、「お母さん、今日、ちょっと弁護士さんが来るもんで、抜きたいけど」ちゅったら、「なんで、弁護士さん、来るの？」って言ったもんで、「死んだおじいちゃんが、こういう病気で、悪い病気じゃないけど、なんか、そうやってやられていたもんで、そういうののあれでね、お母さん、話に行くもんで」って言ったら、「ああ、そう。いいよ。それじゃ、わたしがいるで」って。だけど、そのときは、その話はしなかつたのね。「わたしはもつと前から知ってたよ」って言ったのは、〔家族訴訟〕裁判の〔勝訴判決〕のときに、はじめて言ったの。「お母さん、よかったね。わたしも、その話は聞いてたよ」って。娘らも、「ばあばら、ほんとに辛い思いをただねえ。いま、やっと、こうやって楽しく過ごせてるだねえ」って言うの。

〔さっきの靈感の話だけど、そういえば、その孫が〕そっちの部屋で、いつも一人でおとなしく遊んでたけど、なんか言ってるだよね、ちっちゃいときに。だから、独り言かと思つただよ。そうしたら、〔写真のおじいさんと〕話をしてたって。そういうのって、ほんとに、あるだらね、やっぱり。

#### 外便所まで背を貸して

**娘のカズエ** テレビでハンセン病のなんかをやったときなんか、〔母がおじいさんのことを〕話してくれた。足も不自由だったでしょ。昔は、外に便所（トイレ）があつてね。歩けなかったもんだから、子どもながらに背負っていく。それもね、昼間じゃなくって、暗くなってから、人目がないとき、背負って連れてったというのは言ってた。「重たかったよお」ってゆってたけどね。こう、肩を貸してね、なんか、後ろからもたれて歩いてくるような感じ、片足で。〔うちでは義足は〕はめてなかったと思う。

#### ウツル病気ではないと早くからわかっていたのに

**娘のカズエ** 母から聞いたときは、全生園の病院の先生が「うつらない」と言っただけで、〔全生園へ〕連れてかれたぐらいだから、やっぱり、うつる病気じゃないかな〔と思った〕。でも、二人とも〔病気にも〕ならないで、じゃ、それもほんとにだっただなあとと思ったし。それで、テレビで、ちょうど、〔2001年の熊本地裁の判決のあと、厚労大臣の〕坂口力さんがニュースで、「あれはうつる病気じゃない」と言ってるのを、たまたま観て、母とほんとに喜んだ。「やっぱり、そうだったじゃん。じゃ、なんでね、あのときにね、全生園の先生がこうやって言ってたのに、国は〔ちゃんとした啓発を〕やってくれなかっただいな。そうすりゃ、こんなね、辛い思いせんですんだのにね」って言ったのね。その反面、「いまごろ、こんなのテレビで大々的にやられるの、嫌だね」って、二人で言ったの。また、ぶり返されるみたいで。二人でね、うれしい半面、すごい不安だったのね。

わたしの従兄（いとこ）が、〔昭和〕18年生まれなわけね。すぐ、川のむこうに住んでるけど。その従兄が結婚するときに、相手が、ちょっとけっこうなうちだったもんだから、やっぱり、聞き合わせをして、わかって、結婚反対されたけど、従兄らは全生園（びょういん）の先生に「うつらない病気だ」という証明を書いてもらったっていうの。それを相手のうちへ二人で持って行って〔説得して〕、親が認めたちゅう話を聞いている。〔従兄夫婦には〕男の子が〔昭和〕42年ごろ生まれているだよね。だから、〔昭和〕40年には結婚してる。そのときに全生園（びょういん）の先生が証明を書いてくれたっていうのも、〔わたしが最初の結婚をするずっと前から〕そういうあれはわかっていたよね。

#### 伯母と母が家族訴訟の原告に

**娘のカズエ** 〔今度の家族訴訟は〕わたしがたまたまね、母らが前に、多磨のほうの療養所（あれ）へ、〔もう〕一回行きたいって言ってたもんだから、ちょっとパソコンで見ようかやあとと思ってね。たしか、東村山って言ってたなあと思って、「東村山」で探したら、「全生園」というのが出てきてね。それでこんど、「ハンセン病」ちゅうので〔検索を〕やってたら、熊本の裁判所（あれ）で、こういう家族の訴訟（あれ）を立ち上げましたって。そういやあ、母らもそうだったでね、仲間に入れてもらえるのかなあとと思って、それで熊本〔の弁護士さん〕に電話したわけ。そうしたら、「全生園（そこ）の〔在園〕証明をもらって、戸籍謄本とかいろいろ書類を集めて送ってください」というので、送ったわけ。そうしたら、「弁護士が話を聞きにうかがいます」ってなって。——わたしが、たまたま、パソコンで見た〔のがきっかけ〕。

〔送っていただいた『ハンセン病家族たちの物語』を〕読んだらね、同じようなさあ、差別されてた話がたくさん出てきてね。やっぱり、こんなたくさん、おなじような体験(あれ)をした人がいるんだなあと思ってね。みんな、辛い思い、しただね。こうやって読んだだけじゃ、どのぐらいというのはわからないけど、相当あれだったらね。きつとねえ。みんな、よおく頑張れたなあと思った。その強さはねえ、びっくりするぐらいだった。母も読みました、あの本。

判決はねえ、わたし、お昼のニュースで見た。〔そのあと弁護士の先生が〕電話で、「テレビで知っていると思いますが、裁判は勝ちました」って。で、「500万〔円の賠償金請求〕でやったんだけど、そういう補償金(あれ)は無理でした。今回、金額よりなによりも、国に謝らせるのが一番の問題でしたので、それは国が認めたので、よかったです」と。そして一言ね、〔伯母と母の〕〔補償〕金額は、最低の額だと思ふ。すごい少ない」って言われた<sup>2</sup>。

### ずっと気遣ってくれた祖母の弟たち

**娘のカズエ**〔話し忘れてたけど〕富三郎のつれそいの出は、すぐ隣村なんだけど。おばあさんは長女で、弟が2人いた。それで、〔富三郎が全生園に収容された〕そのときにね、「子どもを連れて戻ってこい」って言われたみたいなのね。だけど、おばあさんは〔こっちに〕残ったんだって。それでねえ、その弟はね、毎週ちゅうぐらい、日曜日、来てたのね。孫を連れて、遊びに。桑名にいる弟も、年取ってね、おばあさんが亡くなっても、自分が動けなくなるまで、かならず、何ヵ月に一回は来てた。わたしが女だけで、心配して来てくれたみたい。わたしが再婚する前までは、杖ついてね、来てくれてね。「どうだあ。みんな、元気かあ。変わりないかあ」ってゆってね。あんな遠くから夫婦で、わざわざ来てたけどね、いま思うと、やっぱり、こっちのことが心配でね、来てたのかなあと思って。

いま思うと、〔うちの〕おばあさんも、外へ出なかつたものね。ほんとに出なかつた。ほんとに、うちにいるだけだったものね。あんまり、いろいろは言わないしね。物静かな人でね。

〔いまでも、母らは、近所の老人会とかの集まりには〕でない。いっさい、出ない。ずうっと出ない。一回も出たことない。

### 【追記】

わたしたちの聞き取り調査の作法として、ライフストーリーの公表にあたっては、公表前の最終原稿を語り手にお見せすることを不可欠の手続きとしている。今回も、この原稿をお手許にお送りしたところ、2020年11月20日、中田カズエさん(仮名)から電話を頂戴した。以下、4点ほど追記しておきたい。

第1点。90を越えたおふたりの老女が話す言葉が、かなり方言を抑制していて、60代のカズエさんのほうがむしろ土地の訛りを色濃くだして語っていた点について。「よく書いてくれて、ありがとうございます。〔文章になったのを見て〕こういうに話したのかなというの、また思い出しました。〔母たちのほうが標準語に近かったのは〕ちょっと緊張して喋ってたからだと思う。私が普通に〔標準語で〕喋りだすと、母たちはわからなくなるので、〔私は意識して土地の〕訛り(あれ)で話したんだけど。」「母たちは眼鏡をかければ新聞なんか読めるので、また、これも読んでもらいます」。

第2点。ハンセン病家族補償法による補償金の申請手続は済ませ、すでに入金されたとのこと。「伯母のトヨは〔今年の〕5月から介護施設へ入っている。だけど、認知〔症〕のほうもそんなに進んでないし、シルバーカーを使えば一人で歩いて、元気にしています。ただ、2週間に一回の面会が、コロナ〔の感染問題〕でできなくなっちゃって。母のエツは、変わりなく過ごしています。〔トヨとエツと一人180万円ずつ戴いた補償の〕お金は〔トヨが〕介護施設へ入るのに使ったり。〔伯母と母には〕配偶者がいないもんだから、年金も2カ月に4万ちょっとしか入らない。それだもんだから、あの〔補償の〕お金は、ほんとに助かります。これから先もいろいろで掛かっていくもんだから、ほんとに助かりました。みなさんにお世話になって、ありがたいと思っています」。

第3点。「カズエ」という仮名の不思議な縁(えにし)。「この原稿(あれ)で、私の仮名(なまえ)が“カズエ”ってなりましたよね。母たちの姉がカズエって名前なの。『カズ姉(ねえ)、カズ姉(ねえ)』って呼んでたお姉さんがいたけど、二十歳(はたち)のときに熱を出して亡くなったって話を聞いてたの」。福岡が慌てて「知らなかった。じゃ、〔別の仮名に〕変えるね」と言ったら、「うん。これもなんかのご縁かなあと思って、嬉しかったです」と。

第4点。最後に、コロナ禍のために延期になっていた、厚労省・法務省・文科省相手の第3回「ハンセン病に係る偏見差別の解消のための協議」が2020年12月22日には開催の運びとなり、そこで「有識者会議」が設置され、福岡もそのメンバーの一人に選任される見込みであって、そうなった暁にやりたいことは、なかなか地元では啓発の主体として大勢の人の前に立つことができない当事者たちが、遠隔の地に出かけて自分の体験と思いを、匿名性の保障のもとに語り、代わりに、遠隔の地から当事者に来てもらって自分の体験と思いを、やはり匿名性の保障のもとに語る、そういう全国的なネットワークを構築することであると説明したうえで、「それが実現したら、たとえば沖縄あたりに一緒に出かけましょうか」と誘いをかけたら、「はい、わかりました」と明るく応じていただけた。わたしたちは、いわゆる“正しい知識”の普及では偏見差別はなくならない、マイノリティとマジョリティとの関係性そのものを変えていくしかないと考えている。

## 註

1 記録によれば、富三郎は1942(昭和17)年「多磨全生園」に収容、1944(昭和19)年脱走、1948(昭和23)年再収容、1953(昭和28)年全生園にて死亡、となっている。いささか、トヨやエツの語りとのあいだにズレがある。しかし、私たちの長年の聞き取り経験では、記録と語りとのあいだにズレがあるとき、語りのほうが現実をより反映していることがしばしば確認されてきた。

語りを読み解いていくと、トヨが尋常小学校を終えたのが1936(昭和11)年、このとき末妹のエツは小学校2年になる年で、姉が働きに出て孤独を余儀なくされたエツの遊び相手を富三郎がしたというから、この段階では富三郎はまだ収容されていない。しかし、エツが「2年生だか3年生ぐらい」のとき、学校の職員室で教師が富三郎のハンセン病罹患のことを他の教師たちに吹聴していたというから、この時点では富三郎の多磨全生園への収容は現実化していて、地域住民の噂になっていたと考えて差し支えあるまい。富三郎の「収容」は、記録として残る「昭和17年」ではなく、昭和12年頃だったのではないかと推定される。こう推定したほうが、トヨの「〔富三郎は〕ちょうど10年いてきたね、全生園に」という語りとも多少とも合致するし、

エツの「〔自分が〕小学校のとき〔富三郎はすでにうちに〕いなかった」という語りとも矛盾しない。そして、富三郎は、戦況悪化の食糧難のなか、ハンセン病療養所の入所者たちが栄養失調等で次々と死んでいく時期に脱走したが、この「昭和19年の脱走」以前にも、帰省許可をもらってではなく、無断外出のかたちで、しばしば、故郷の実家に帰省していたことが語りから窺われる。毎年のように正月の時期には、家族が全生園に面会に出かけてもいる。そして、戦後再燃した無癩県運動のさなか、従順に自ら療養所に戻ってこなければ、遠隔の、かつ海上に浮かぶ小島の療養所に強制的に送致するぞとの脅しまで受けて、「昭和23年の再収容」に応じたが、その後も家族の面会は続いていた。中田家の絆は、揺らぐことがなかったようである。

- 2 『判例時報』臨時増刊 2020.5.25 号に収録されたハンセン病家族訴訟判決の「別紙原告一覧表」を参照すると、原告となったトヨとエツの父親、富三郎は昭和28年1月に多磨全生園で死亡していて、強制隔離政策の違憲性が明確になった1955（昭和30）年以降における隔離収容による親子の物理的引き離しは認められないということで、「家族関係形成阻害（親子）」の100万円の補償額は認定されず、「差別を受ける地位」の30万円だけが容認されたにすぎなかった。

安倍首相の「控訴断念」をうけて判決が確定したあとの2019年の夏、厚労省と弁護団との「実務者協議」で原案が固められ、2019年11月15日に成立した「ハンセン病家族補償法」では、「ハンセン病元患者の一親等の血族」が支給される補償金は「180万円」と定められ、この金額をトヨとエツは受け取ることとなった。——それにしても、トヨとエツの語りに示された被害の重さに比して、この180万円という補償金額は、あまりに僅少にすぎよう。そして、伯母・母と同様に偏見差別の強烈な被害を体験したカズエは、「ハンセン病家族補償法」の対象外である。元患者の孫が補償の対象とされるのは、元患者との「同居」経験があることが条件とされているからである。

わが国は、国家賠償における《いのちの値段、人権の値段》があまりにも安すぎる。



## **Discrimination on the Hansen's Disease Patient's Grand-daughter as well as Daughter: Interview on Hansen's Disease Problems**

Yasunori FUKUOKA & Ai KUROSACA

On September 1, 2019, we visited a house in a seaside village which had 90 households in the Tokai region of Honshu to meet Toyo Nakata, Etsu Nakata, and Kazue Nakata (all the names in this paper are pseudonyms).

Toyo was born in July 1923 and was 96 years old at the time of hearing. Etsu was born in December 1928 and was 90 years old at the time of hearing. The two were the fourth and fifth daughters of five sisters. Their father, Tomisaburo, was born in 1888. Tomisaburo was sent to the Hansen's disease sanatorium, Tama Zenshoen during the war and escaped in 1944 but confined again in 1948. In 1953, he died at Zenshoen.

After the war, Etsu married a young man in a neighbor village in the form of the marriage that a husband becomes a member of a wife's family, and in 1950 and 1951 he gave birth to two daughters. However, the female shop owner in the village revealed to her husband that her father Tomisaburo was confined in a 'leprosarium', and he left her to finish the marriage life by saying, "People say that your father has strange disease."

Etsu's elder sister, Toyo, spent her entire life as a single to support her family which had only female members.

Born in December 1951, Kazue (67 years old at the time of hearing) is Etsu's younger daughter. Kazue also married a young man in another neighboring village in the same form that Etsu did. But after giving birth to her daughter in 1972, her husband's family learned that her grandfather had 'leprosy' by the same shop owner who had revealed it before. Her husband family even said, "Even if we kill your whole family, we wouldn't be guilty of it," and her marriage life collapsed.

When we visited the Nakata family and said "You went through a lot of hardship," Etsu replied, "Now is the happiest time in my life."

The day after the interview, we received an email from Kazue's daughter (40s) while participating in the "35th Japanese Association of Sociology for Human Liberation Convention" held at Waseda University. She said in the mail, "How do you do? Thank you for your visit in spite of busy schedule yesterday. My mother is not good at using cellphone so I am sending this email on behalf of her. I have never met my great-grandfather, but I visited his grave to report yesterday thing. My mother told me that my grandmother had never shared her story with other people so far but she feels so good after she told her story to you. Thank you very much."

**Keywords:** Hansen's disease problems, Segregation Policy, life story, marriage discrimination